



校長 坂本 晋

みたけが原便り

第10回 「カレーライスと命名」

(1月始業式講話より)

皆さん、明けましておめでとうございます。
冬休みはどうでしたか？ふだん親御さんは仕事、皆さんも学校の勉強の他に塾やら習い事やらで忙しいと思いますが、お正月は皆でコタツを囲んでお節料理や鍋をつつきながらゆったり過ごせたのではないのでしょうか。「お節はもう飽きたからカレーが食べたい」などといったつも、あらためて家族の絆を感じたという人も多かったと思います。

さて、去年は沢山の人に賞状を伝達できてとても嬉しく思いました。今年も新年早々4人の皆さんが賞を貰ったということでさい先の良いスタートとなりました。でも実は一つだけちょっと困ったことがあるんです。それは、賞状に書かれた皆さんの名前が読めない時があるんです。世に言うキラキラネームでしょうか。そういう時は間違えるわけにゆきませんので、先生方をお願いしてこっそり賞状にフリガナを振ってもらっています。

以前は、女なら宏美とか亜由美、男なら浩之、学、進一郎など、漢字と読み方がすんなり重なる名前が多かったのですが、しばらく前に法律が変わって使える漢字が多くなった。名前に関してはどんな漢字をどんな風に充てて読んでもいいんですね。極端な話、黒という漢字を白と読ませてもかまわないんです。ただし、今日はこの後休み明けテストですが、国語の試験ではもちろんペケになります。

1年生の諸君には入学式でも話したのですが、名前をつける時、皆さんの親御さんは、きっと我が子にこんな子になって欲しいという願いを込めて一生懸命考えて命名してくれました。そこにあるのは混じり気のない純粋な慈

しみの心です。ですから皆さんが今日ここにあるのは、そういう親御さんの一途でひたすらな愛情表現の賜物です。

人は名前をつけられた瞬間から一個の独立した人格を持ちます。ですから、親子といえども時には考えがぶつかり合ってケンカをすることもあります。もしかしたら、みなさんの中には今朝もお母さんと喧嘩してきたという人がいるかもしれません。「宿題はやったの？」「うるせー！」とか。それはそれで良いのです。独立した人格なのですから考えや感じ方が違って当たり前です。というよりも、元々子供というか特に中学生は親に反抗する存在でもあるのです。

入学試験の面接の際に「尊敬する人は？」と聞かれて、胸を張って「父です」「母です」と答えるのはもちろん何の問題もありません。皆さんのお父さんやお母さんは間違いなく立派な人です。でも、もし皆さんが、「どんな人になりたいか？」と聞かれて、「父です」「母です」と答えるならば、それが達成できた時、つまり、「ああわたしもやっとお母さんのようになれたなあ」と思った時に、そこが皆さんの人生のターミナル・終着点になってしまいます。

はたしてそれで満足していいのか？それだと、「親のコピーになる」ということで、たしかにDNAは受け継いでいますが、「ちょっと違うかな？」と違和感を感じるのではないのでしょうか。

子どもは、親に反抗し、大人の背中を踏み台にして成長していきます。人類が歩んできた進歩の歴史というのは、そうやって若者が絶えず

大人を乗り越えることを繰り返してきた過程でもあるのです。ただし、そうやって大人に反抗してきた若者が今皆さんの親になって、自分の失敗や経験を踏まえて「もっとこうした方がいいよ」「このままだといけないわよ」と云ってくれるのですから、それに耳を傾けないとしたら、それはそれでやっぱりモッタイナイ気がします。

女優の渡辺美佐子さんという方の話です。現在87歳。去年の6月まで原爆朗読劇を34年間続けていました。渡辺さんが少女の頃、太平洋戦争のため長野県に疎開していました。戦争末期で日本人は誰も彼もがお腹を空かせて飢えていた時代でした。ある日、どこでどう材料を工面したのか、お母さんがカレーライスを作り始めました。その頃のカレーライスは特別なご馳走でした。「できたわよ！」の声に、少女は土間に駆け下りてナベを手に持ちました。ところが喜びのあまり体が弾んでしまい、下駄を履いた足がもつれて転んでしまったのです。カレーは残らず土間に飛び散ってしまいました。その時お母さんは、「やけどしなかった？」とだけ云って、黙々と後始末をしたそうです。

「あの時の母親の顔は今でも思い出します」、と渡辺さんは著書の中で書いています。何十年もたって女優になった渡辺さんの舞台を見たお母さんは、「下駄を履いて舞台を歩くんだもの、転ぶんじゃないかと気が気じゃなかったわ」と話したそうです。娘を心配する母の思いとはそういうものであり、戦時中の下駄とカレーの思い出はそれほど強烈な出来事でした。

この先、もしみなさんが親子ゲンカをした時は、自分の名前を思い浮かべてみて下さい。親御さんはかけがえのない我が子に世界中で一番素敵な名前をつけようと一生懸命考えてくれたのだなと実感できると思います。波立つ気持ちも静まるのではないかと思います。

皆さんの親御さんは、今はまだあなた方を自

分の手元に置いておきたいと願っています。でも、そこがいくら居心地良くてもいつまでもとどまることはできません。子供とはやがて親を乗り越えて独りで生きていく宿命にあるからです。その日に向かって、ゆっくりとでかまいません、この令和2年を自立に向けてじっくり力を蓄えていく1年にしていきましょう。

